

最優秀賞

私の来世

京都先端科学大学附属中学校 二年

徳田 葵

私の来世は水がいい。そう思い始めたのは最近のことだ。私は、水は何にも縛られないと思っっている。どんな形にもなれるし、どんなところにも行ける。海の水はいろんな生き物に出会える。農業用水は植物の中に入ることが出来る。そんな自由な水に、私はなりたい。

でも、今世界では水に関する様々な問題が起こっている。例えば、衛生設備が不十分な事により、水質汚染が起きている。私は正直、汚染されたような嫌われ者の水にはなりたくはない。もし私が汚染された水になり、感染症の菌などを人間にうつしてしまつたら、罪悪感に苛まれるだろう。

その他にも、世界的に水の使用量が増えている現状がある。もし私が水になり、水道から出てきたとする。それなのに、出さなければにしていた水道だった為に、どこにも行けずに下水道行きになつたら、悲しくて仕方がない。

そして、私が一番深刻だと思っっている問題は、水による紛争だ。水の所有権や配分を争つて紛争に発展する国も珍しくない。もし私が水になつて、自分を奪い合うがために人の命が失われるなんてことになつたら、大きな喪失感に覆われることだろう。

私は小さい頃、「水は色々な場所を旅して同じところに帰つて来る」という話を聞いたことがある。もしその話が本当なら、私の未来が水であつた場合、このような問題に直面することになる。汚染された水になり、水道から出てきてもすぐに下水道に流れ、自分を奪い合った人が亡くなる来世は、流石に勘弁してほしい。だから私は、現世でこの問題を解決してから来世を迎えたい。そのために何が出来るか考えてみる。

私がまず思いついたのは募金だ。ありきたりだが、手っ取り

早く支援することが出来るのは間違いなく募金であると思っっている。今は、ユニセフやワールド・ビジョン・ジャパンなど信頼できる団体が数多く存在し、子どもの私でも行動にうつしやうい支援方法だと思う。

そして、自分たちで節水することも大切だと思う。節水すれば世のためになるのはもちろん、お金の節約にもなり、まさに一石二鳥だ。この作文を書くにあたって、私も少しだが取り組んでみた。もちろん、すぐに目に見えた効果がでることはなかったが、なんとなく世の中に貢献しているような気持ちになり、凄くいい気分だった。これからも続けていこうと思う。

しかし、水の問題は世界に蔓延していて、ここであげた解決策だけで解決するとは私も全く思っっていないし、思えない。私はまだ子どもである。そのため、募金の金額にも限界がある。現地に行つて支援することもまだできない。水の問題を解決しようとしている団体に所属することもまだ難しい。しかし、出来ることもあると思う。

バタフライエフェクトという言葉をご存じだろうか。この言葉は「非常に小さな出来事が最終的に予想もしていなかったような大きな出来事につながる」という状態を表したものである。もし私の作文によつて募金活動をする方が増え、どこか遠い場所で救われた人がいたとしたら。もし私の作文によつて節水する人が増え、必要な人のところへ届くようになったとしたら。一つ一つは小さな行動かもしれない。意味があるのか疑いそうになつてしまうかもしれない。だが、その行動の輪が広がつて、大きな問題が解決したとしたら。そんな来世のために、私は行動し続けようと思う。

優秀賞

水の素顔

京都先端科学大学附属中学校 二年

佐保 里衣奈

私はこの春、鹿児島県にある祖父の家へ行つた。そこは自然が豊かなところで、温泉がたくさんあったり、夜には虫やカエルたちの声がにぎやかで、遠くまで広がる田畑や桜を見ながら、夕焼けを一人占めする時間がとても好きだ。

最終日、私たちは鹿児島県のさつま町にある鶴田ダムというところへ行つた。鶴田ダムは一級河川である川内川の河口から五十一キロメートル先に位置し、大鶴湖に貯まった水の力を利用して発電する目的でつくられた、西日本最大級のダムである。私はこのダムを目の前にして、鳥肌が立った。あまりの雄大さにより、恐怖心や好奇心など複雑な感情が溢れてきて、しばらく眼下に広がるダムをぼうっと見ていた。

ダムを見たときはただひたすらに、壮大さに恐怖心と感動を受けていたが、家に帰ってから、ダムについて調べてみた。

平成十八年七月、川内川は豪雨に襲われた。鶴田ダムは必死の洪水調節をしたが、ついに貯水容量を使い切ってしまった、緊急放流を行った。しかし、とてつもない豪雨だったため上流にも下流にも甚大な被害をもたらした。下流では水位が上昇し、被害が拡大した。そのため鶴田ダムの役割は非難にさらされてしまったのだ。

私はこのことを調べたとき、水の恐ろしさを改めて痛感した。膨大な量の水が町々を飲み込もうとすればもう私たちには勝ち目がない。パニックややり場のない恐怖から、何の罪もない人々と争いや責め合いが生まれてしまう。自然の力を目の前に私たちが無力さをなげくべきではない。経験を重ね、知恵を出し合う中で最善を尽くすべきなのだ。しかし、「慣れ」と「油断」は決して共存してはならない。どんなときも危機感と恐怖心を

持ち合わせることが、大切だと私は思う。

水は恐ろしく膨大な力の中に何とも美しい姿を兼ね備えている。

きらきらと光る水辺、嫌な気持ちをも流れてゆきそうな川のせせらぎ、草木を育てる魔法の力、私たちの体をつくることのあるがたみ、おいしいお米を食べられる最大の力ミ。私たちの生活は水によって潤い、より良いものへと変化している。

水の中の顔も理解し、上手く利用することが私たちの未来に最も必要なことだと私は思う。

優秀賞

籍水利資人工

京都市立西ノ京中学校 三年

江部 花音

「今、琵琶湖の水位下がりがまくってんの知ってる？このままではほんまに琵琶湖の水止められてしまうで！」理科の授業中に先生が放った衝撃の一言。一体どういうことだろうと半信半疑で「琵琶湖 水位」と検索すると信じられない光景が表示された。琵琶湖の水位は基準値よりも七十センチ近くも低下。明智光秀の廃城、坂本城の石垣が地上に姿を表しモンサンミッシェルの様だと話題になってる。夏以降の降水量が著しく少なかったのが原因とのことだった。十四年間生きてきて、ここまで生活用水について心配したのは今日がはじめてである。私は、普段何げなく使用している琵琶湖の水がどれほど貴重なものなのかを再確認すべく、琵琶湖疎水記念館に赴くことにした。

疎水記念館は小学校の時から訪ねてきたのだが中学生となった今行ってみると想像していたよりもはるかにスケールの大きな話に驚愕し、疎水について意欲的に知ろうとしなかった自分を強烈に恥じた。琵琶湖疎水ができたのは明治時代。京都が日本の首都ではなくなったところから物語は動き出す。当時の京都府知事、北垣国道は何としてでも京都にもとの活気を取り戻したいと考え、疎水の開発に至った。疏水工事の責任者は当時まだ二十三歳の田邊朔朗である。まだ大学を卒業したばかりの若者がかつての都の行末を背負っていたなど現在では考えられない。彼は東京大学工学部で英語のみでの授業を受け海外の新しい技術を進んで取り入れた。豎坑工事はまさにその代表例である。長等山の上から四十七メートルもの豎坑を掘り、そこから横に掘り進めることでトンネルを作る。この豎坑工事は日本で初めてであり、またここで作った第一トンネルは当時日本最長

のトンネルであった。さらに日本人のみで行う最初の事業でもあったという「日本一づくし」。だがその建設は困難を極めた。当然だが豎坑の中は薄暗く作業は全て手作業である。途中で地下水が溢れ出してしまうこともあったそうだ。そのような状況下でも京都の未来を夢見て工事を続けた人々を思うと涙が溢れそうになる。また田邊も米国に視察に行ったり自ら土木工学についての授業を行ったりしたという。こうして四年七カ月に及ぶ工事の末、第一疎水が完成した。その後、水力発電所と第二疎水も完成し、日本初の電車運行、電灯、紡績、伸銅など新たな産業に活用された。

琵琶湖疎水には建設に関わった人物や政府の有力者たちによる扁額が掲げられている。その中で田邊はこんな言葉を残している。「籍水利資人工」自然の水の力を、人の仕事に役立てるといふ意味である。当たり前のように水道を捻ると出てくる琵琶湖の水。しかしそれは信じられない程多くの人々の力の賜物である。だがその根底にあるのは、母なる湖こと琵琶湖の存在であることを忘れてはならない。我々は自然の中の水を「お借りして」いるのである。漢字六文字で水の尊さを簡潔に訴えた素晴らしい文章だと感じた。気付くと展示物を前に大きく頷いていた。

後日、滋賀県まで父とドライブに行った。小さい頃から慣れ親しんできた琵琶湖は、記憶の中にある姿と同じである。大雨が降った影響で少し水位が回復したのだという。少し野性的なしかし母性も感じるような力強い波。青々と日の光に照らされたその姿はどこからどう見ても自然の産物である。「籍水利資人工」疎水記念館で見た言葉が頭をよぎる。そして私は母なる湖に向かって宣言した。「京都まで来はったら、大切に、誇りを持って役立たせて頂きます。」

特別賞

当たり前に感謝

大山崎町立大山崎中学校 二年

鈴木 愛来

私には妹が二人いて、その内の一人はまだ小さいです。その小さい妹が、手を洗う時、水を出しっぱなしにしてしまうことが時々あります。そんな時私は、妹に向かって「もったいない。」

と注意をします。けれど、水は水道の蛇口をひねると簡単に出すことができるし、妹の手洗いの分のみで、大量のお金がかかる訳でもありません。それなのになぜ、もったいないと感じるのか、私には分かりませんでした。そんな私に、一つの出来事が起こります。

その出来事というのは、二時間ほど、私の家がある地域で水が出なかつたというものです。その時、私はお風呂から上がり、ご飯の準備をしていました。するとお母さんが、水が出ないと、かなりあせつた様子で伝えてきました。本当なのか自分で確かめるために、キッチンで蛇口をひねってみましたが、残念ながら水は出ませんでした。その時、私はお風呂に入っていて良かったと、安心し、ご飯を食べ始めました。最初は特に普段と変わりなく過ごせていましたが、時間が経つにつれて危機感を感じるようになりました。このまま何日も水が出なかつたらどうしよう、トイレはどうするの、など、不安に思うことだらけでした。一番気になったのが飲み水のことです。地震などの災害が起きた時のために、家に備えている水には極りがあります。その水が出るまでの間、私の家の中で、水は、最も貴重なものになっていました。

さいわいなことに、二時間後には水が出るようになりましたが、そのたつたの二時間、水が出ないだけでも、信じられないくらい、不安になりました。そしてこの出来事は、私が「水」

について考えるきっかけにもなりました。水は、私たちが生き、生活していく上で必要不可欠なものです。食事、お風呂、トイレなど、水は日常で常に使用し、蛇口をひねるとすぐにきれいな水が出るのが、当たり前になっていきます。当たり前になつてくると、そのありがたみが分からなくなってしまうことがあります。

視野を広げて世界を見ると、水に困っている人や、水道水が原因で病気、感染症になる人が山ほどいます。雨が極端に少なく、水が手に入らない人たちの支援のためのコマースャルも見ることがあります。このようにきれいな水を簡単に手に入れない人が、たくさんいる中で、私たちが水をむだ使ひして良いはずがありません。安全な水が出るのが当たり前の際境に、生きられている私たちは、もっとありがたさを自感し、感謝しながら生活しないといけないと思います。

水をむだにしているのを見て。
「もったいない。」

と思うのは、水は貴重なものだからなんだと分かりました。水はお金がかかるからもつたいたい、と言う人もいます。水は水道代が高かつたとしても、低かつたとしても、水は私たちにとつて、なくてはならないものです。水は、お金に関係なく、大切にしていかなければならないと思いました。

世界には、水が簡単に手に入らない人もいる中で、私たちは当たり前安全な水を利用することができています。水は貴重だということを忘れず、この恵まれた環境に感謝したいです。また、水だけに限らず、私の生活に必要な物、支えてくれる人、安全で恵まれた環境などの全てのことを、当たり前と思わず、感謝しないといけないと、改めて感じました。一つ一つのことに感謝しながら生きていきたいです。

佳作

今後の水の使い方

福知山市立夜久野中学校 三年

中川 由萌

日本にも、水の問題がある。水の問題といえ、世界で一人に3人が安全に管理されていない水を使っていたり、水不足だったり日本のは思い浮かばないだろう。日本は水道水がきれいで飲めるし、海に囲まれていて、雨もよく降るので問題はないと感じる。しかし、日本にも問題がたくさんある。

日本でも水不足が起こっている。一九九四年には、全国的に水不足が起こったり、本州や九州、四国で渇水になったりした。日本は降水量が多いけれど実際に使える水は少ない。お風呂やトイレなどでたくさん水を使うので生活用水がとても多く、一日一人三百Lも使っている。また、生活用水だけでなく、工業用水の使用量も多い。使用量がとても多いので水不足が起きていくかもしれない。

日本は、水質悪化もしている。ごみの不法投棄や施設の老朽化によって悪化している。ごみが捨ててあるのを見ることはあるが、見てみぬふりをしてしまっている。都会では、ゴミが多いイメージがある。田舎は、ゴミが少ないと思われているけれど、思ったよりある。ボランティアで拾っている人はたまに見かけるけれど、見つけてすぐ拾う人は少ないと思う。また、日本は高齢化や人手不足が進んでいる。だから、上下水道の整備に取り組む作業員が減ってきてしまっている。

これらを解決するために日本でやっていることはたくさんある。節水栽培や工場・事業場からの有害物質を含む汚水の地下浸透を禁止のような取り組みがある。一番身近な取り組みはダムだと思ふ。ダムの役割は、雨をむだにしないように水をためて、水資源を確保することだ。それだけではなく、洪水調節や河川環境の保安だったり役割がある。ダムは、私たちや水を守ってくれている。

私たちにもできることはたくさんある。まずは、現状をよく知ることが必要だ。現状を知り、自分がどうすればいいのかを考えることが大切だと思う。洗濯・トイレなど水のむだ遣いを減らすことができる。洗濯の回数を減らしたり、トイレの水の量を調節したり、使っていないときは水を出さないようにすればいいと思う。調理器具や食器は油や汚れを拭いてから洗うこともできる。油汚れをそのまま流してしまうと川や海の水質汚染につながる。なので、油汚れを一度キッチンペーパーで拭き取ることが大切だ。石けんを使いすぎないことも必要だ。石けんを大量に流してしまうと水質汚染につながる。だから、環境に配慮した洗剤を使ったり、使いすぎないように気をつけたりすることがとても大切だと思う。大量の水を使うお風呂の残り湯を有効活用することもできる。掃除や洗濯で使うことができる。お風呂の残り湯を使うことで節水になる。このようなことをすることで水の問題を解決していける。

私の家の近くの川でも、ゴミが流れているし、昔と比べてきれいな水がある所にいるサワガニが減ってきていると感じた。また、たまにあわのようなものがたくさん流れてきた。昔と比べると川が汚くなってきたかと思う。昔を取り戻すには、私たちにできることを一人一人がやったり、日本の水は大丈夫だと思わずに、現状を知ったりすることがとても大切だと思う。一人一人が意識することが重要だと考える。

水問題といえ、日本はあまり出てこない。しかし、この作文をきっかけに水に関する問題を調べていくうちにさまざまな問題を知った。私は、手を洗う時に手をぬらしてから水を出しっぱなしにして、石けんをとることがあって、改めて気をつけたいと感じた。一人一人が意識していくことで大きく変わっていくと思う。小さなことでも気をつけるだけで未来が変わっていくと感じた。一人の行動で変わってくると思ふ。

自分たちにできる事

京都先端科学大学附属中学校 一年

峯 颯希

「飲める水がどのくらいあるか知っている？」ぼくは、「サントリー天然水」のコマーシャルを見て、飲める水の量を調べてみた。すると、地球の水のおよそ九十七パーセントは海水で真水のおよそ七十パーセントは北極などの氷だから、簡単に飲める水は、全体の一万分の一しかないことが分かった。「地球は、水の惑星と言われているけど、実際に人間が使える水がたくさんあるわけではないんだな」と思った。

そこで地球の水の事を調べてみると、バーチャルウォーターの事を知った。バーチャルウォーターとは、実際に使っていないけども間接的に使用している水の事だ。例えば、ごはんをお茶碗一杯分作るのに、二百リットルの水を使っている。お茶碗一杯分のごはんを食べると二百リットルの水を消費しているという事だ。他にも新聞や、インターネット、洋服やプラスチックなどを作るのにも水が必要だ。つまり、ぼくたちは、生活の中で、たくさん水のバーチャルウォーターを使っている。

また、日本は、外国から年間で六千四百億リットルのバーチャルウォーターを輸入している。この内、およそ六割は、農産物だ。その為、麦などの穀物をたくさん日本に輸出しているアメリカが、一番日本にバーチャルウォーターを輸出している。ぼくたちの生活は他の国の水資源に支えられているのだ。つまり、世界の水が足りなくなると日本にいるぼくたちも困ってしまう。この情報をみて、ぼくは、世界の水問題も他人事じゃない事に気が付いた。

でも逆に日本からもたくさん水のバーチャルウォーターを輸出しているのではないかなとも思った。「日本は車の輸出货量が多いはず」と調べてみると、車を作るのに必要な水は、一台当

たり六万五千リットルで、輸出している車分の水の量は三千九百億リットルだった。これにはさすがに驚いた。だからこそ、日本で車を作るのに必要な水を節約すれば、大きなメリットになるのだ。お母さんは、「日本で節約しても、世界の水が足りていない人が助かる訳じゃない？」と言っていたが、その水がどこに行くのかを考えて節約すれば、全然そんなことはなかった。ぼくみたいに感じた人は自動車メーカーの中にもいるらしくトヨタ自動車の「水環境インパクト最小化チャレンジ」や、日産自動車の「ニッサン・グリーンプロگرام」などで水使用量の削減をしている。

このような事は、家庭ではやりにくいけど、家庭での節水でも未来の生活を守ることではできると思う。なぜなら、今みんなが節水をしなかったら、何年後かに日本でも水不足が起きるかもしれない。だけど、今みんなが節水したら水不足が起きるかもしれないどころか、他の国の水不足もなくなっているかもしれないから。節水の方法としては、シャワーの時間を短くしたり、直接的な節水にはならないけれどペットボトル飲料をあまり買わないようにすると、ペットボトルを作るのに使う水を減らすことができる。他にも、雨水を再利用したり、はみがきをする時のうがい用の水をコップに入れて水道の水を止めるなどの方法がある。

ぼくの将来の夢は宇宙飛行士だ。将来宇宙に行って青い地球を見てみたい。だからぼくは、できるだけ水の節約をしようと思う。

佳作

命と未来を奪う水

京都先端科学大学附属中学校 二年

進藤 唯央

私は、小学六年生のときに、水質汚染について学習した。水質汚染とは、人間の行動によって河川や海洋などの水質が悪化する事だ。例えば、水の中の化学物質や有機物が増えたり、色度や濁度が増えたりすることである。学習した当時、私は水質汚染を軽いものと考えていた。その重大さや深刻さに、気づいていなかったのである。

中学一年生になったとき、水質汚染について学び直す機会があった。せっかくの機会だと思い、インターネットで水質汚染について調べてみることにした。すると、日本ユニセフ協会のサイトが目にとまった。そのサイトには、こんなことが書かれていた。

「やっとの思いで手に入れた水は、命と未来を奪う水」

私は衝撃を受けた。私たちが毎日当たり前で飲んでいる水が、命と未来を奪う？私には到底分からなかった。なぜ命と未来を奪うのか、さらに調べてみることにした。すると、世界人口の半分以上が水道を使えるようになった今でも、六億六三〇〇万人もの人が安心して飲める水が身近にないということがわかった。そんな人々は、池や川、野ざらしの井戸などの飲用に適していない水源を頼るしかないのだ。さらに、汚染された水を飲むと抵抗力の弱い子どもたちはたちまち下痢を起こし、下痢によって亡くなってしまふ子どもたちは年間に三十万人にものぼっている。けれども、生きるためにはどんなに汚れていてもそんな水を飲んでいくしかないのだ。

私は調べたことを思い返し、「私が当たり前だと思っていたことは、全く当たり前ではなかったのか」と気付いた。いつでもきれいで安全な水を飲める環境に感謝しなければならぬ

と思知らされた。同時に、汚染された水から命と未来をつなぐ水に変えていきたいと考えた。

それから私は、生活している中で出る生活排水の扱い方を覚えていくことにした。例えば、油や食べ残しをそのまま流さないうようにした、油はふきとってから洗ったり、食べ残しはシンクにネットを張り、流れないようにした。とても小さなことかもしれないけれど、どんなに小さな努力でも、いつかは実を結びと信じて頑張ってみることにした。

初めて水質汚染という言葉聞いた日からもう少しで二年になる。初めは何もわからなかったけれど、少しずつ理解していった、生活の中で心がけるべきことを知った。私はあの日から、大きく成長することができたのだ。これからも、命と未来を奪う水から、命と未来をつなぐ水にできるように、小さな努力を続けていきたいと思う。明日も元気な人々の笑顔が見られるように。